

「主イエスの声を聴こう」（ヨハネによる福音書10:1-10）

今日の福音書の主イエスのたとえ話しの相手は、ファリサイ派の人々です。彼らはこのたとえの意味が分からなかった、とあります。わたしたちはどうでしょうか。分かるというのは、どういうことでしょうか。み言葉が分かる、ということは、本を沢山読んでいるとか、知識が多いということでは無いようです。なぜなら、ファリサイ派の人々は、他の人たちよりも、律法の規定を良く知っていたであろうし、聖書もよく読んでいたはずだからです。しかし、その彼らには分からなかったのです。どうして彼らには、分からなかったのでしょうか。このことを、今日読まれた10章の前の9章、生まれつきの盲人が癒やされるという箇所から思い巡らしたいと思います。

9章では、生まれつき目が見えなかったことで罪人とされていた男が、主イエスに出会います。主イエスは土をこねて彼の目に塗り、シロアムの池で洗いなさい、と言われます。彼がそれに従って目を洗うと、目が開かれました。それを知った人々は不思議がり、誰によって目が開かれたのかと問います。しかし、彼は主イエスの声しか聞いていないので、「イエスという人」だとしか答えられません。彼はただその「声」に従い、目が開かれた、という事実しか語りえないのです。

今日のたとえ話では、主イエスのご自分を羊飼いにたとえ、その声に聞き従う羊は豊かな命に与る、と言われていますが、まさに、この目を開かれた男は、主イエスの声に聞き従い、目が開かれたのです。さて、人々は今度は目が開かれた男をファリサイ派の人々のところへ連れて行きます。ファリサイ派の人々は彼を問いただします。なぜなら、彼の目が開かれたのが、安息日であったので、イエスが癒やしたのだとしたら、それは安息日に働いた罪を犯したことになるからです。そればかりではない。ファリサイ派の人々は既に、イエスに対してある種の疑いを持っていたので、事実目の前に目が開かれた人がいるのに、それを認めようとしません。ファリサイ派の人々は、彼に何度も問います。「誰がお前の目を開いたのか」。「お前は、その目を開いてくれた男を何者だと思ふのか」。目を開かれた男は、ただひたすら「分かりません。しかし、わたしの目は開かれたのです。」と事実だけを答え続けます。それしかできない、しようがないのです。ファリサイ派の人々はついには、彼の両親までも呼び出し、問いただしますが、これもまた効果なし。すると彼らはまたしても目が開かれた男を呼び出し、同じことを繰り返し聴きます。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」もう、結論ありきです。しかし、目が開かれた男はただ、こう答えるだけです。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」彼は、ただ事実だけに留まるのです。それでも、ファリサイ派の人々は、イエスが罪人であるという前提を覆したくない、何とかして自分たちの主張が間違っていないことを確認したい。だから、まだしつこく尋ねます。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」もう、何度も同じことを繰り返し聞くのです。とても嫌な気分になるやりとりです。立場の上下は明確、権力側が結論ありきで尋問してくる、不条理極まりないやりとりです。目が開かれた男はうんざりしたことでしょう。こう答えます「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」この答えがファリサイ派の人々の逆鱗に触れました。ファリサイ派の人々はこう言い放ちます。「お前はあの者の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのか知らない。」これは決定的な言葉です。自分たちは、モーセの弟子、つまり、律法を授かった選ばれた民である。そして、神のこと、救いのことを知り尽くしている。そんなわたしたちが間違えるわけがない。間違っているのはイエスという男に決まっている。そう彼らは信じ込み、目の前で起こった神の癒やし業すらも否定してしまうのです。何とも恐ろしい話しです。自分が正しいと思い込む人間の姿です。そこには、神の言葉、み心が入り込む隙間などないのです。今日の使徒言行録で読まれた、ステパノを石打にする人々もそうです。ステパノが主を賛美するのを、ワーワーと騒ぎ立て、耳を塞ぎ、聴こうとしない人々。自分の正しさが揺らぐことなどあってはならないと、聞こえないように、耳をふさぐ人間の姿です。

ここに、今日の福音書でファリサイ派の人々が、たとえが分からなかった理由が示されています。彼らは、自分たちは見えていると思っていたのです。律法を知り尽くし、人々を裁く権利が自分たちにあると思っていた。今日のたとえば、羊の群れについて語られていますが、言うなれば、当時、羊たちが生きる柵の中はこのファリサイ派の人々のような者が支配する世界だったのです。人間が神に成り代わり、裁き合う世界です。そこは、神の国、神の支配する柵の中とは全く異なる世界、主イエスが言うように、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりし合う世界です。神の支配する柵の中は、すべての羊は神に愛された命として豊かに餌を与えられ、生きる世界です。しかし、当時の世界は柵の中で羊が裁き合い、不必要とされた羊はその外へと追い出され、餌を求めてさまよって生きるしかありませんでした。実際、9章で目が開かれた男は、ファリサイ派の人々に「お前はまったく罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言われ、ついには、追放されてしまいます。生まれつき目が見えなかったこと、そして、事実を語ったことで、彼は罪人とされたのです。なんとという不条理でしょうか。外に追い出されるということは、市民としての権利をすべて失うということです。わたしたちであれば、一切の社会保障も受けられない、事件に巻き込まれたとしても、警察にも相手にされない、選挙権もない、すべての権利を失う、ということです。

しかし9章の最後では、外へと追い出された彼のもとに主イエスは現れ、彼に出会い、彼は主イエスへの信仰を告白し、真の命を生きるものとされるのです。主イエスはまさにこのために、この世に来られたのです。主イエスは「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。」と言います。主イエスは、柵から追い出された人のことを救い出すため、いや、未だ柵の中にいる人々をも救い出し、神の支配する柵の中へと導くために来られたのです。主イエスのご自分のことを、門であるとも言います。主イエスは人々を新たな囲い、主イエスが門としておられ、主イエスが羊飼いとしておられる新たな世界へと人々を導くためにこの世に来られたのです。そのまことの羊飼いの声に聞き従うならば、人は良い羊飼いのもとの命を受ける、しかも豊かに受けることになる、と主イエスは仰っているのです。

これは、遠い過去のイスラエルに限定される話でしょうか？わたしたちが生きる今のこの世界にも、当時のファリサイ派の人々のように、「自分こそが正しい」という声が溢れています。何よりも自分自身の内にも、神よりも自分を正しいとしてしまう思いがあります。この世の多くの価値観、声の中で、わたしたちは迷い、戸惑いつつ生きています。どれが正解か分からない。時として、「こっちの水は甘いぞ」という誘惑の声についていってしまうことだって往々にしてあります。しかし、主イエスの声をこそ聴くことが人の生死を分けるのです。主イエスはヨハネによる福音書8章で、「真理はあなたがたを自由にする」と仰っています。主イエスの言葉の中に本当に自由が、真実があるのです。目が開かれた男のように、主の言葉にひたすら留まるなら、わたしたちもまた、真理と自由の命に迎えられます。そのために、主の声が聴こえるように、「自分こそが正しい」「分かっている」という思いを砕き、いつも自分を開いていなければなりません。そのために祈り続け、神との対話にいつも身を、真の正しさを問い続けなければなりません。友が迷うことのないように、互いに祈り合わなければなりません。そして、聖書のみ言葉に聴き続けなければなりません。こうだ、という解釈にとらわれることなく、今、み言葉が自分に、人を愛するために何を語りかけているのかと聴き続けなければなりません。そうでないならば、み言葉が分かるということはない、まことの自由、命はないのだと、今日のみ言葉はわたしたちに語っています。

最後に、ヨハネによる福音書と同じ著者のヨハネの手紙Ⅰの最後の箇所を読みます。手紙ですので、福音書よりも、今日のみ言葉が直接的に語られているように感じます。

「わたしたちは知っています。わたしたちは神に属するものですが、この世全体が悪い者の支配下にあるのです。わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にはいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です。子たちよ、偶像を避けなさい。」

わたしたちが偶像の声ではなく、主イエスの声を聴く群れでありますように。